

〔華實年浪草二見〕彼岸 時正龍樹菩薩天正驗記云欲界六天中央夜摩兜率中有大城名曰中陽院

首八神并大梵天王大歲神乃至玉女道祖神等人中天上冥官冥衆集會注一切善惡天尊降教勅八神持三卷勸帳三復八校獻天尊覽一行役司命司祿俱生神也問彼天尊有何由以二八月降天正勅召天地神者帝釋尼吒天自在將軍所居宮殿前有高樹名天生樹形如須呂春開華有七日散七葉七色有青黃赤白紫翠秋結果有七日落七葉七色如上見開花移中陽院見落陽還本宮定知法爾道程所令然也

〔倭訓栞前編二十五〕ひがん 源氏に十六日ひがんのはじめにてとも又ひがんのはてとも見え

たり諸説佛語を引れたれど附會多し大般若經に即便前進得到彼岸と見ゆ我邦上代に般若波羅密會行はれし生死を此岸とし涅槃を彼岸とし波羅密を到彼岸と翻すよて彼岸會といへりされば七日の佛事日本にのみ行はれて西土天竺にはなき事成よし砥平石録に見ゆ春秋二仲晝夜過不及なし此を時正といふ日本後紀に國分僧に春秋二仲月別七日存心金剛般若經を轉讀せしむるよし見ゆといへり新古今集に

今こゝに入日を見てもおもひ知れ彌陀の御國の夕暮の空日沒觀の意なるべし二中の入日はわけて日光の赫奕たる觀て知ぬべし天日天の中道を廻り晝夜の長短相ひとしきをもて也夫木集に

けふ出る春の半の朝日こそまさしき西の方はさすらめ

〔鹽尻三十五〕一曆家春秋の彼岸會を書する事久し昔は春分秋分の日を中日にあたるやうにせし事安倍家の曆本に見ゆ近世は春秋二分を三日目をその初にし六日目を中日とす九日目を終りとす古へは彼岸に入る日沒日に値れば一日を延て次の日を入りとせし故實也貞享曆沒日を用ひずいつとても二分一日を隔て彼岸の初とす

〔長曆上〕二季彼岸事

二八月中前三日也沒日四日來專善根日也